様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 31 日現在

機関番号：13801
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008 ～ 2010
課題番号：20520012
研究課題名（和文） 「生ける死生観」の発掘と倫理学的基礎づけ
ー在宅ホスピスの現場との連携を通して
研究課題名（英文）laying the ethical foundation for the “views on death and dying“ based upon the lived experiences of the terminally ill patients, in collaboration with the palliative home care.
研究代表者
竹之内 裕文（Takenouchi Hirobumi）
静岡大学・創造科学技術大学院・教授
研究者番号：90374876

研究成果の概要（和文）：本研究は、在宅緩和医療を受けている患者・家族を対象としたインタビュー調査を実施し、死生観にかかわる患者・家族の語りを広く収集するとともに、現代日本の倫理的・文化的背景を踏まえつつ、思想史的な視座から死生観の変位を跡づけた。そのうえで各人が自らの生と死をどのように捉え、その「意味」をいかに語り出したかを焦点に、多様な専門的背景をもつチームにおいて考察と分析を進め、倫理学的な観点からの基礎づけを試みた。

研究成果の概要（英文）：In close cooperation with medical practices of palliative home care, this research laid the ethical foundation for the various “views on death and dying“ based upon the lived experiences of the terminally ill patients, after widely discovering and assembling them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総 計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究代表者の専門分野：哲学・倫理学
科研費の分科・細目：哲学・倫理学
キーワード：倫理学原論・各論、死生観

１．研究開始当初の背景

欧米からの輸入段階にようやく別れを告げ、「応用倫理学 applied ethics」と総称される学的な営みは、わが国においても独自かつ多様な展開を見せつつある。たとえば生命倫理学の分野では、日本の社会的・文化的な背景を踏まえた研究、あるいは医療現場や市民層に対する研究成果の還元が進められようとしている。しかしそこには、哲学的・倫理学の普遍的な（universal）知見を個々の特殊な（specific）事例に適用する（apply）という抜きがたい発想が、依然として見受けられる（竹之内裕文「哲学的な生と臨床の現場――介助の経験を顧みつつ」、『臨床倫理学』第 2 号所収、臨床倫理検討システム開発プロジェクト編、2002 年）。これとは一線を

画すかたちで開始された「臨床哲学」や「臨床倫理学」の取り組みを見ても、なるほど各種研究会や哲学カフェなどの企画を通して、多種の専門職や市民層との接触が積極的に試みられているにせよ、研究者自らが臨床の個別的な場に足を踏み入れ、そこで営まれる「生」（生命・生活・人生）と直接に対峙するという姿勢は希薄であるといわざるをえない。従来の哲学的・倫理学的な取り組みにおいては、このようにして「生と死」にかかわる各人のいわば等身大の理解、つまり「生ける死生観」が取り逃がされ、それゆえ主題的な考察の対象とされることもなかった。

死生学研究という各人の「生と死」にかかわる学的な探究についても、これと同様のことが指摘できる。A・デーケンによる「死への準備教育」を嚆矢として、わが国でも1980年代以降、「死の臨床研究会」や「日本臨床死生学会」といった学会が発足し、また近年では、東京大学21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築」や東洋英和女学院死生学研究所等の研究拠点が形成されてきた。これらの取り組みは、市民層に対する啓蒙活動、既成の学的枠組みを超えた学際的な活動など、たしかに一定の社会的役割をはたしてきたといえる。しかし、これらの学会や研究拠点における活動の力点は、会員の大多数を占める医療関係者による専門的知見の共有、あるいは学際的な研究成果の集積におかれてきたといってよい。教育や医療などの現場に身をおく各人の死生観は、その文化的・社会的背景とともに、ここでも、十分な光を投げかけられることがなかったのである。

以上の問題意識に基づいて、本研究は、現場に身をおく各人の死生観に照準を定める。ここで終末期疾患を抱える病者に注目するのは、人は多くの場合、生老病死の苦しみによって、なかでも死の可能性の切迫によって、自らの生と死の「意味」に直面させられるからである。生活全般に影響を及ぼす慢性疾患、あるいは生命にかかわる終末期疾患は、それを抱える者の「生」の自明性を動揺させ、その「意味」の主題化を迫るのである。ではなぜ、終末期医療の現場のうちでも、特に在宅ホスピスを拠点とするのか。生と死の「意味」をめぐる各人の探究は、さしあたり、それぞれが積み重ねてきた経験や履歴の一つひとつを手がかりにしてなされる。にもかかわらず、現代日本の「病院死」は、各人の生の経験――家族等との人間関係もふくめて――が刻印された「空間」（自宅・地域）から、患者を引き離し、各自が「生の履歴」と〈再会〉する機会を奪ってきた。これに対して、在宅での終末期生活では、自宅を中心とした地域社会の「空間の履歴」（桑子敏雄『環境の哲学』、講談社学術文庫、1999年）に触発されるかたちで、生と死に関する豊かな語りが紡がれつづけている。この点で在宅ホスピスの現場は、現代の「生きる死生観」にふれる得がたい場と考えられるのである。

２．研究の目的

以上の通り、終末期の在宅生活は、生と死に関する豊かな語りの源泉と位置づけられる。在宅ホスピスの現場は、「生ける死生観」にふれる得がたい場であり、これを発掘し、倫理学的に基礎づけることは、現代日本社会に生きる同時代人に対して、「生と死」に向きあう足がかり――病院死の急増をはじめとする社愛変動により掘り崩されつつある――を提供するという意義をもつはずである（竹之内裕文「「間」の出来事しての死――在宅ホスピスの現場から学び、考えてきたこと」、『文化と哲学』第24号、静岡大学哲学会編、79－103頁、2007年11月）。

本研究では、在宅ホスピスを始めとする終末期医療の現場との緊密な連携関係に基づいて、終末期疾患を抱える病者の「生ける死生観」が広く掘り起こされ、その倫理学的な概念化、基礎づけが試みられる。それによって、今日の日本社会に生きる同時代人に対して、各人が自らの「生と死」に向きあう手がかりが示され、またそれとともに、人間の死生をめぐる哲学的・倫理学研究の新たな一歩が刻まれるならば、本研究の目的は果たされたことになる。

３．研究の方法

Ａ）在宅緩和医療従事者との緊密な連携のもと、在宅緩和医療を受けている患者・家族を対象としたインタビュー調査を実施し、死生観にかかわる患者・家族の語りを広く収集する（主として、社会学を専門とする研究協力者が担当）。このようにして同時代の身近な死生観の発掘を進める。

Ｂ）それと並行して、現代日本の倫理的・文化的背景、なかでも高度経済成長期における社会的変動を見すえつつ、現代の闘病記、あるいは文人（homme de lettres）が書き遺した書簡、日記、遺書に題材を求めるというかたちで、思想史的な視座から死生観の変位をたどっていく（主として、日本思想史を専門とする分担研究者が担当）。

Ｃ）前項のＡ）とＢ）において、各人が自らの生と死をどのように捉え、その「意味」をいかに語り出したかを焦点に、多様な専門的背景をもつ人文社会科学研究者および多職種の医療・介護スタッフにより構成されるチームにおいて、考察と分析を進める。

そのさい研究代表者は、ハイデガー哲学における「意味」理解――そこへの眼差しのもとに各人が自らの生と死を受け止めるところ（Woraufhin）――に立ち、チームによる

共同討議を主導する。すなわち、「いかなるものへの眼差しのもとに生と死が受けとめられているか」という観点から、死生観の概念化、基礎づけが図られ、死生観の諸相が区分されていくのである。

先述のように、研究代表申請者は近年、他なるもの（者・物）との「間」の出来事として「死」を捉える論考を公刊しており、C）の共同作業では、この試論の射程が検証されることになる。なおC）に際しては、わが国における死生観教育の現状と課題を踏まえ、「どのような死生観が、いかなる理由から求められるのか」という問いを携えつつ、考察を進める。

４．研究成果

（１）初年度は研究代表者、分担研究者（桐原健真氏）、研究協力者（田代志門氏、鷹田佳典氏、山本佳世子氏）がこれまでに実施してきた研究の成果の結集と進展に努めた。

A）聞き取り調査においては、新たなフィールドの開拓に努めるとともに、遺族を対象としたインタビューを開始した。その結実として、東北在宅ホスピスケア研究会『2007（平成 19）年 6 月実施 在宅ホスピスご遺族アンケート報告書』（東北大学臨床死生学研究会、2008 年）をもとに「在宅ターミナルケア遺族調査データベース(http://www.sal.tohoku.ac.jp/rinshiken/database/）を作成し、遺族調査を多様な側面から検討する基礎づくりを行った。

B）思想史研究では、日本における「病院信仰」「医療万能主義」の歴史的文化的背景を、近代的病院の草創期であるキリシタン時代から検討し、これを明らかにすることにより、近代日本の死生観の変位を主題的に究明する礎石を築いた。

C）研究代表者は、「生ける死生観」の発掘に先立って、「生」と「死」をめぐる現代哲学・倫理学の研究動向等を視野に収め、「倫理学的な基礎づけ」の準備を進めた。なお、各自が進める個別的な研究の有機的な統合を図るべく、月例の会合（在宅緩和医療従事者も参加）の機会を開催した。

（２）研究二年目は、在宅緩和医療の患者・家族を対象とした聞き取り調査をより本格的に展開するとともに、死生をめぐる課題に対する思想史的なアプローチそのものの意義と課題について開かれた討議を実施し、生と死の「意味」に迫る方法について共同討議を重ねた。

A）在宅緩和医療従事者との緊密な連携のもと、在宅緩和医療の患者・家族を対象としたインタビュー調査をより本格的に展開し、死生観にかかわる患者・家族の語りをさらに広く収集した。また定例の研究会で、インタビューの成果を発表し、チーム全体で共有した。

B）思想史研究では、東北大学臨床死生学研究会シンポジウム「人文学と現場の協業による臨床死生学の創生に向けて」を主催し、２つの講演と３つの研究発表を行った。それを通して、ターミナルケアの現場に対して文化研究からいかなるフィードバックが可能であるのか、あるいは臨床の現場がいかなる文化研究を要求しているのかという問題意識から、現実社会との対話に開かれた研究のあり方を検討することができた。

C）日本思想史学会におけるパネルセッションなどを組織することで、当該分野における臨床死生学の可能性と、学的関心喚起に努め、反響を得ることができた。

（３）最終年度は、研究成果の統合という観点から研究代表者、研究者分担（桐原健真氏）、研究協力者（田代志門氏、鷹田佳典氏、山本佳世子氏）の個別研究を相互に検証しながら、各自が進めてきた個別的な研究の有機的な統合を図り、その成果を月例の会合（在宅緩和医療従事者も参加）のほか、学会や研究会の機会に広く発信した。

A）在宅緩和医療従事者との緊密な連携のもと、在宅緩和医療を受けている患者・家族を対象とした本格的なインタビュー調査（第二次お迎えアンケート）をチームとして実施し、死生観にかかわる患者・家族の語りを広く収集した。

B）こうして同時代の身近な死生観を発掘するとともに、近代日本の倫理的・文化的背景を見すえつつ、思想史的な視座から死生観の変位を明らかにした。具体的には、近世から近代日本における死生観の変容を、浄土真宗を中心とすると国学者との世界観闘争という形で捉えることで、「あの世」「来世」や超越的存在の否定の過程を明らかにした。

C）前項のA）とB）において、各人が自らの生と死をどのように捉え、その「意味」をいかに語り出したかを焦点に、多様な専門的背景をもつ人文社会科学研究者および多職種の医療・介護スタッフにより構成されるチームにおいて、考察と分析を進めた。なお研究代表者は、「生」と「死」をめぐる現代倫理学の研究動向、日本における展開等を視野に収め、生ける死生観の「倫理学的な基礎づけ」を試みた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 竹之内裕文「在宅ターミナルケアを阻害する社会的・文化的因子の構造解析」(『総

合科学としてのヘルスリサーチ』、財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団発行、61-67 頁、2010 年、助成研究報告、査読無）
②竹之内裕文「「よく生きる」ことを問いなおす――「人間」への問いとしてのヒューマン・エコロジー」（『思索』42 号、29－58 頁、2009 年、査読有）
③岡部健、相澤出、竹之内裕文、桐原健真「日本社会における「死の文化」変容――在宅ホスピスの現場から見えてくるもの」（『公衆衛生』Vol.72. No.6、483－489 頁、2008 年、座談収録）
④桐原健真「「外夷の法」――吉田松陰と白旗」（『日本思想史研究』40 号、82－98 頁、2008 年、査読無）
⑤桐原健真「死而不朽――吉田松陰における死と生」（『季刊 日本思想史』73 号、55－74 頁、2008 年、依頼論文）
⑥竹之内裕文「地域コミュニティに支えられた生と死――スピリチュアルケアの「医療化」を超えて」（『文化と哲学』25 号、1－31 頁、2008 年、依頼論文）

〔学会発表〕（計 9 件）
①竹之内裕文「死すべきものとして生き、出会う」、シンポジウム「終末期ケアと死生観」（「ケアの臨床哲学」研究会主催、患者のウェル・リビングを考える会・〈ケア〉を考える会共催、2011 年 3 月 12 日：大阪市・大阪大学中之島センター）
②竹之内裕文「「自然死」概念の再構築――死の医療化を超えて」、日本生命倫理学会第 22 回年次大会シンポジウム「医療にとって「死」とはなにか？」（2010 年 11 月 21 日：豊明市・藤田保健衛生大学）
③桐原健真「世界観闘争としての真宗護法論」、日本思想史学会 2010 年度大会「パネルセッション 3　近代仏教と真宗の問題」（2010 年 10 月 17 日：岡山市・岡山大学）
④桐原健真「「あこがれ」としての病院信仰」、日本思想史学会 2009 年度大会「パネルセッション 1　在宅ホスピスの現場における日本思想史研究の可能性～「病院死」を選択する日本人～」（2009 年 9 月 18 日：仙台市・東北大学）
⑤桐原健真「弘道館とその祭神――会沢神学の構造」、日本宗教学会 2009 年大会（2009 年 9 月 12 日：京都市・京都大学）
⑥竹之内裕文「現場から考えるということ」、東北大学臨床死生学研究会・シンポジウム「『どう生き　どう死ぬか――現場から考える死生学』の編者を招いて」（2009 年 8 月 29 日：白石市・木村屋旅館）
⑦桐原健真「歴史学から倫理学へ――日本思想史の試み」、日本倫理学会第 59 回大会・ワークショップ 2「日本思想から倫理学へ」（2008 年 10 月 3 日：つくば市・筑波大学）
⑧竹之内裕文「パリアティブ・セデーションと安楽死――哲学・倫理学の視角」、第 14 回日本臨床死生学会・シンポジウム「palliative sedation と安楽死」（2008 年 9 月 6 日～7 日：札幌市・かでる２・７）
⑨竹之内裕文、田代志門、相澤出、大村哲夫「臨床死生学――日本の社会・文化・歴史へのまなざし」、日本ホスピス緩和ケア協会年次大会・サテライトワークショップ 1（2008 年 7 月 20 日：仙台市・仙台国際センター）

〔図書〕（計 8 件）
①竹之内裕文（編著）『七転び八起き寝たきりいのちの証――クチマウスで綴った筋ジス・自立生活 20 年』新教出版社、1 - 329 頁、2010 年 10 月
②竹之内裕文（共著）『ヒューマン・エコロジーをつくる――人と環境の未来を考える』共立出版、175-197 頁、2010 年 9 月
③桐原健真（共著）『近代日本の仏教者――アジア体験と思想の変容』慶應義塾大学出版会、245-275 頁、2010 年 4 月
④竹之内裕文（共著）『岩波講座哲学 08　生命／環境の哲学』岩波書店、249-266 頁、2009 年 6 月
⑤竹之内裕文（共著）『安楽死問題と臨床倫理』青海社、99-108 頁、2009 年 12 月
⑥清水哲郎（監修）・竹之内裕文（編著）・桐原健真（共著）『どう生き　どう死ぬか――現場から考える死生学』弓箭書院、iii－289 頁、2009 年 5 月
⑦桐原健真（共著）『近代日本の仏教者における中国体験・インド体験』DTP 出版、61-72 頁、2009 年 3 月
⑧桐原健真（編著）『東アジアにおける公益思想の変容　近世から近代へ』日本経済評論社、296 頁、2009 年 3 月

〔その他〕
ホームページ等：
タナトロジー研究会
(Society for Thanatology)
http://www.sal.tohoku.ac.jp/thanatology/
東北大学臨床死生学研究会
http://www.sal.tohoku.ac.jp/rinshiken/

６．研究組織
(1)研究代表者
静岡大学・創造科学技術大学院（教授）
竹之内　裕文（Takenouchi Hirobumi）
研究者番号：90374876

(2)研究分担者
東北大学・大学院文学研究科（助教）

桐原　健真（Kirihara Kenshin）
研究者番号：70396414

(3)連携研究者
東京大学大学院・人文社会系研究科（教授）
清水　哲郎（Shimizu Tetsuro）
研究者番号：70117711